The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	あんたも、母 : フェミニスト現象学を手がかりとした「母」についての考察
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	メタフュシカ. 2016, 47, p. 77-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

あんたも、母――フェミニスト現象学を手がかりとした「母」についての考察

桂ノ口結衣

0．はじめに

この論文、あんたに向けて書くよ。わたしもあんたも、引き受けられる「母」のこと。

2015 年 3 月、サラ・ヘイナマー教授が来日して、大阪大学で公開セミナーが開催されることになった。彼女は、妊娠・出産・老い・死・性などを「フェミニスト現象学」によって考えている哲学者なのだと、来日前、聞いた。わたしは「フェミニスト現象学」が何であるか知らず、なんとなくうさんくさく思っていたくらいだったけれども、5 月に出産予定日のある 2 人目の子ども・エリを妊娠しており、それがモチベーションとなって、わたしにヘイナマーの「妊娠」についての論文を読ませた。面白くって、驚いた。

彼女の論は、前々から違和感のあった「わたしを指して呼ぶ『母』」とは別の、「わたしが既に引き受けているものごととしての『母』」について考える手がかりをくれた。その二つの「母」は、本当にとても違うんだよ。それでわたしは、わたしたちは、「母」だと名乗ること――わたし自身を指して「母」と呼ぶこと――を否定しようとしたり、する。あんたが、たとえば「筆者は男であるからけっして母にはなれない、母の立場にはなれないものである[1]」と言ったように。あんたが、たとえば “[…]here I am going to be a mom and I don’t want to be a mom just like that[2]” と言ったように。あんたが、たとえば今、呼びかけられている中に自分は入っていないと思うように。この論文は、わたしたちが誰でも、わたしたちが弱っていても、わたしたちがわたしたちのまま、

---

1 彌永信美「母」、永井均・中島義道・小林康夫・河本英夫・大澤真幸・山本ひろ子・中島隆博編集委員、2002『事典哲学の木』講談社、pp.789-791

2 Vangie Bergum, “WOMAN TO MOTHER: A Transformation”, Bergin&Garvey Publishers, inc., Massachisetts, 1989, p.18 インタビューの中で、思いがけない妊娠に気づいた時の実感を、のちに振り返ってインタビュイーが述べたときの言葉。「今ママになりつつある、でも私はそんなママなんてものにはなりたくない。」

引き受けられる「母」を確かに見つけ、大切にするために、考察をまとめたもの[3]。

これから「1. 妊娠の現象学から」で、ヘイナマーの論文をレビューして、「境界をくり返し設け直す re-establish」経験としての「妊娠」について確認する。1 章では、あんたは、出てこない形で、書かれる。まるであんたなしでも存在できるかのような「哲学」や「研究」のことばたち、そうしたクールなことばの語り手たち、わたしたちを、眺めながら進もう。「2. 母の現象学へ」では、「母」について現象学的に記述し、1 章と合わせて、わたしが考える「ときどきの状態」「既に引き受けているものごと」としての「母」を提示する。ここは、ヘイナマーの来日セミナーで発表したものを元にしていて、一番読んでほしいところ。最後に「3. あんたも母やし、ちゃうならわたしやって母やない」で、2 章の記述における「わたし」とは誰であるのか、これまで語られてきた「母」の文脈、わたしたちを「指して呼ぶ『母』」の文脈に載せる形で考えてみる。

読んでみて。何を思ったか、聞かせて。ブーイングでも、いいよ。

1.「妊娠の現象学」から

この章では、ヘイナマー（2014）が主張した、「境界をくり返し設け直す re-establish」経験としての「妊娠」について確認する。

そもそも「西洋哲学」は、「主－客」や「自－他」という二項をうまく立ててものごとを捉え、探究してきた。ただしその時、たとえば「私」や「自己」や「主体」というものは、とりあえず揺らぎも、欠けも、変化もせず在るものとして、想定されている。「こちら」の枠をひとまず決定できればこそ、「こちらではない」項を立てることもできるのだから。

「現象学」は、「西洋哲学」がそうやって想定してきた、たったひとつそれだけで存在するような「こちら」ではなくて、かならずつねに何ものかへ向かっているものとしての意識をもち、かならずつねに互いに絡み合いつつ存在するという私たちのありようにまなざしを向け、そこから探究することにした。現象学は、「主－客」や「自－他」の結ばれる「－」を問いに付し、つぶさに観察し、記述してゆくその仕方だ。

「フェミニズム」は、揺らぎも欠けも変化もせず在る「私」「自己」「主体」という想定には、排除しているものがあり、見ないよう抑圧していることがある、と示し、また、現にそれらを内包し、解放するよう働きかけてきた。たとえば毎月の月経による影響を受けて変化するこの私を、たとえば罹っている病と切り離せないこの私を、出発点の「私」としよう、と。フェミニズムにおいて「妊娠」は、「西洋哲学（男性中心的、自己中心的）」が当然のごとく扱う「主－客」「自－他」といった差異が「当然」ではなくなるような経験として着目されてきた。

ヘイナマーは、これまでのフェミニストによる「妊娠」についての言説を、とくにヤング、クリステヴァ、ボーヴォワールを取り上げ、以下のように整理する。

---

[3] この動機により、「妊娠」「母」について扱う本論文を、男性論的に「産み」への接近を図る居永（2015）への小さな応答・応援としたい。筆者は彼の以下の指摘に賛同し、実践するよう試みた。*「[……] 女性的経験の現象学的記述が、固定的で抑圧的な「女性的経験」を構築してしまうことに常に配慮しながら考察を進める必要がある。」* 居永正宏「フェミニスト現象学における「産み」をめぐって：男性学的「産み」論の可能性」、大阪府立大学女性学研究センター『女性学研究』、22、p.105、2015

ヤング（[1984] 2005）は、妊娠について現象学的に記述した。妊娠中、妊婦は何が自分の経験で何が胎児の経験かという区別をはっきりできないこと。たとえば胎動。そして妊娠中、身体は彼女自身であるともないとも経験されること。たとえば妊娠前のいつもの身体をイメージしても、そうは動かないこの身体。ヤングは、「自」と「他」の境界が不明瞭になる、ないし融合するような経験として、「妊娠」を描き出したのだった。

ヤングとは対照的に、クリステヴァは「妊娠」について、たとえば『かなしみの聖母 Stabat Mater（[1983] 1986）』を見ると、分割 separation ないし自己疎外 self-estrangement や、自己変容 self-transformation に関する特殊な型として表している。「妊娠」では、「自」と「他」との底知れない断絶 abyss が、私の身体の中で、起こる。「妊娠」は、妊婦の内側で今まさに育っている「他者」の気配より先立ちさえして、世界と関わる彼女自身の感覚器官を左右する。そんなふうに、「妊娠」においては境界が、（失われるのではなく）さまざまな軸で新たに据えられるのだ、と。

一方、ボーヴォワールについては、『第二の性（[1949] 1966）』での「未来の母においては主体と客体の対立が消滅する。彼女は自分の体をふくらませているこの子供とともに生命につつみこまれた一つの曖昧な一対をつくる。[4]」という主張に着目する。この主張は、ヤングの言ったような「自－他を隔てる差異が打ち消される」ということではない。「自己」を超越するような、コンフリクトでもなければ互いに正当化しあうのでもない、ふたつの感覚器官そのものどうしの「関係」の提示だとヘイナマーは読む。

このボーヴォワールの、対称的なつがい pair ではなく非対称的で共依存的な一対 couple、「一つの曖昧な一対」という母－胎児のアイデアが、メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』への直接的応答として提出されたことに注意を促し、ここからヘイナマーは「妊娠」と感覚器官について見てゆく。ヘイナマーによれば、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における主なアイデアのひとつは、「私たちの世界的なつながりに大まかなスケッチを与えてくれているのが、感覚器官（の匿名性ならびに非－人称性）だ」というものであり、そしてそれに対するボーヴォワールの主なアイデアのひとつが、「女性に与えられているものとして人間の身体を考えると、それは個人的出来事のために大まかなスケッチを与えてくれるもの、というだけでなく、2 つの区別される自己がコンタクトする具体的な地点でもあるんだよ」というものだった。いくつかの[5] 身体は、個人的経験を与えてくれるような感覚器官（の匿名的操作）に加えて、もう 1 つの感覚する存在、あるいは潜在的にもうひとりの人間の発生と生命維持を支えるような機能、最終目的にもう 1 つの感覚器官の持ち主を必要とするような機能をも伴っている。

ヘイナマーは以上の分析をもって、妊娠経験が「契約や対立やコンフリクトに基づいた困難な成果」とは全く異なるモデルの「共生 co-existence」を提供していることを確認した。さらに、「誕生」の現象学は、自己反省的なしかただけではなく、胎児－母親というコミュニケイティブな一対の、共感的で想像的な探究にもよるべきだと示唆して締めくくる。

4　生島遼一訳『ボーヴォワール著作集　第二の性』、人文書院、1966、p.310

5　わたしははじめ、ここで「いくつかの」を「女性の」と書いていたが、この類の無邪気さは放置すべきでないと思い、訂正した。

実はヘイナマーの論文中で、ヤング、クリステヴァ、ボーヴォワール―メルロ＝ポンティのつながりはあまり明らかでないのだが、わたしは関心に沿って、以下のように読んだ。

ヘイナマーは、「妊娠」は「自－他」や「自分のもの－異質なもの」という境界を浸食するのではなくて、そういった両者の境目をくり返し－設け直す re-establish のだということを最終的に述べたいと冒頭に宣言しており[6]、また中で「妊娠については、ヤングのような『自分であるし、ない』といった矛盾的な表現にとどまらず、時間経過に沿って起きる変化や再－構築をしっかり表現する必要がある[7]」と提言している。ヤングと彼女につづくフェミニスト現象学者たちは、しばしば「妊娠」を、「フェミニズム」という文脈に沿って、「主－客」「自－他」という差異を問いに付すため、「差異が浸食される、曖昧になる経験」として記述してきた。けれどもこういった記述は、「妊娠」という現象を、描ききれているのだろうか？ここでクリステヴァの論は 2 つの意味を持つだろう。1 つは「妊娠」が、「差異が浸食される経験」とは端的に異なる、「特殊な、自－他が断絶しているという経験」としても描かれうるものであると示すこと。もう 1 つが、「妊婦自身の感覚器官を左右する経験」としての「妊娠」を示すことである。とくに後者については、これまでヤングらも、たとえば身体変貌にまつわる経験として触れてはきた。変わった体の重心、乳首、嗅覚、気分、などなど。それらが、私の身体が私のためのものだか胎児のためのものだか曖昧になった、「差異が浸食される経験」と記述されてきたことは妥当だったろうか？ヘイナマーが、メルロ＝ポンティと絡めながらボーヴォワールを提示したのは、「いいえ」の答に拠るだろう。「感覚器官が左右される」その経験は、「自－他の差異が浸食される経験」ではなく、「目的としてでない、機能的・根源的あり方として、他者と共生する／される経験」とも言えるのではないか。あるいは、「どこまでが『自』でどこからが『他』かという境界は、変化するものであり判然としない」という経験は、共生のあり方として提示したとき、より大きな価値をもつ。「一つの曖昧な一対」としての自－他を、産まれてきた人間はすでに誰もが経験したことのある根源的な「共生」のかたちと見なせばこそ、「妊娠」という現象を記述し、分析することの意味が開かれてゆく。「妊娠」は、たった一部の女性に固有の経験であるとしても、同時に、その「たった一部の女性」から産まれてくる、「すべての人間」の生が既にもつ「共生」の経験として明け渡ってゆく。

わたしがこのヘイナマーの論から最も興味をもったのは、「自－他」の境界が曖昧である、差異が浸食されていると感じるその時、その境界はどのようなものであるのか、かつての境界からの変化を捉えつつ、つぶさに観察しようというアイデア[8]である。また、その際彼女が用いた「re-establish」という語は、通常「復旧、再建」といった意味であるが、わたしは「re-」を「繰り返し」

---

6 Sara Heinämaa “An Equivocal Couple Overwhelmed by Life”: A Phenomenological Analysis of Pregnancy, in *Philosophia, 4(1)*, 2014, p.14

7 同上 , p.23

8 竹村による以下の指摘とも通じるところがあるように思われる。「それぞれの場面で身体が身体形態からどのようにずれているか、その偏向がなぜ起こるか、どのように錯綜しているのかといった、いわば模倣の失敗の動的軌跡が、新しい身体形態へと――それがどのようなものかを前もって予測することは不可能な形態へと――わたしたちの身体を開いていくものとなるだろう.」竹村和子『思考のフロンティア　フェミニズム』、岩波書店、2000、p.68

と読んだ。境界の曖昧な揺れ動きとは、実際には変化（破壊と創造、撤去と設置…）の繰り返しにほかならない。

そしてここからわたしは、もしかすると「妊娠の現象学」とされてきたこれまでの研究は、むしろ言い換えてしまってもよいほど、「母の現象学」と接続しているものではないかと直感した。「妊娠」は、身体ごと自－他の境界をくり返し引き直す経験であるという点で確かに特殊ではあるが、「母」という経験とも折り重なっている可能性がある。実際、「妊娠」についての諸記述[9]の中で、「妊婦 pregnant woman」と同義であるかのように、とくにことわりもなく「母 mother」は主語にされてきた。「一つの曖昧な一対」として「自－他の境界がくり返し－設け直される」という経験は、「妊娠」の現象なのだろうか？むしろ、「妊娠」において、同時に経験されている「母」の現象であるのではないだろうか？続く 2 章から、「わたし」に現れる「母」の意識とは、何に向かい、どのように現れているのかを記述し、その「わたし」とは一体何であるかをも問いながら分析することで――すなわち「現象学」によって――「母」について探究してゆこう。

2.「母の現象学」へ

2012 年、1 人の子ども・ロクが産まれた。その子は、わたしの腹から出てきた。彼が腹にいる時から、たとえば産婦人科で、わたしは「（胎児の）お母さん」と呼ばれることがあった。出てきてからは、もっととてもたくさんの場所で、わたしは「（ロクの）お母さん」と名指されるようになった。「お母さん」という声をきくたび、即座にわたしの目は、亡くなった自分の母くらいの年の人間を探したものです。でも回数を重ねるごとに、わたしは、すこしずつ自分自身がその声に応答することに慣れた。「お母さん」「はい」。「お母さん」「はい」。でもそれは、わたしに「母」としての自覚がめばえたとかそういうことではない。ただ、新しいニックネームに慣れたのだ。

この「母」「お母さん」というのは、いったい、何なんだろう？辞書を引くと「母」は「女親」で、「親」とは「子を生んだ人、または、他人の子を自分の子として養い育てる人」であるという。まあ、わたし、該当する。でも、「お母さん」というのは本当に「その子を産んだ、または養い育てている人」という意味なのかな？

いまわたしは、誰かがわたしをそう呼ぶとき、わたしが誰かをそう呼ぶときのことは一旦置いておくことにしよう。そのかわり、わたしは、どんなときに自分を「母」だって意識するのかってことから始めて、「母」の意味の内実を探してみる。

発表原稿を書いている 2015/1/26（月）、わたしはこの日、朝 6:30、アラームで目が覚めたところから自分を思い返してみた。息子のために何か作業している時間はうんとたくさんある。でもわたしは、ほとんどの時間、ただわたしだ。このようなわたしならば彼の「母」であるかもしれないと思うところは、2 箇所みつけた。

9　本論文で取り上げたヘイナマーの論文も含む。

1つ。朝ご飯に昨晩の残りのスパゲティを提供した。まだ寝たいとぐずりつつ、彼はわたしに「食べるの手伝って」と言った。2才半を過ぎている彼は、本当はもう、こぼしながらではあるが自分でフォークを上手に使い、食べられる。そして彼の言う「食べるの手伝う」は、彼が赤ちゃんだった頃のように、わたしがフォークに食べ物を載せ、彼の口にタイミングをみはからって運ぶということを意味する。「自分ではいやなん？」「ぜったいいや」。時計を確認する。8:15。本当は8:30には保育園に登園したい。遅くなればなるほど、保育園に着いてからゆっくり気持ちを切り替える時間がとれず、たいてい彼は半日、冴えなくなる。今からではがんばっても8:30登園は無理だな。わたしは考える。「自分で」も、大切だ。わたしは今日体調が悪く登校を諦めようかとも思っているし、こちらが「自分で」を押した結果ものすごくぐずったとして、最悪の場合保育園に行かなくたっていいかもしれない。一方、彼はクラスの中で最年長だから、保育園ではいつも完全に自分で食べていることだろうってことも思う。しかも春に第二子が産まれたら、もうこんなふうに食べるのを手伝ってあげることもできなくなるだろう。今、身重であるためにだっこや体を使った遊びをわたしは彼とできていない。すでに彼はたくさん我慢してくれているのだ。これくらい甘えたっていいのではないか。わたしは、彼に何ができるだろう。何をすべきで、何をしたいだろう。考えていたこの時、わたしはきっと母だった、と感じる。（ちなみにその後わたしは「食べるの手伝」い、できるだけ早く登園することを選択して行動した。）

もう1つ。登園してからも、彼は「帰りたい」と泣いていた。ずっと泣いて、朝のおやつはスキップし、園庭遊びの時間になってもまだ激しい抵抗をしていた。園庭遊びは彼の好きな時間だ。気分を切り替えられるかもしれない。わたしは彼といっしょに、園庭の見える年長クラスのテラスに行った。ほかの子たちの三輪車で遊ぶ様子、それから先生が倉庫からなにかを出す様子…。彼はまだ泣いていたけれども、興味をもっていた。興味をもっているけれど、でも気分を切り替えることを必死に拒否しているようにも見えた。わたしはやはり体がだるく、このまま彼と家に帰ったっていいじゃないか、と思った。こんなに小さな子が、こんなに抵抗し、そしてこんなにはっきりと何がしたいか主張しているのだから、それに従ったっていいじゃないかと。ああ、でも、身重のわたしといくらいてもできない思い切り体を動かす遊びのほうに、いざ参加してみれば彼もきっと楽しいし、体のストレスも解消されるだろう。わたしは彼をみながらずっと考えていた。このように迷い、考えているとき、やはりわたしは母だっただろう。（ちなみにわたしは結局、彼に声をかけて促し、彼は靴を履いて園庭へおりた。）

この2つの時、わたしは何をしていたか。彼の欲望と自分の欲望とを、できるだけごちゃ混ぜにせずに考えようとしていたんだと思う。1つめの例では、彼は「食べさせてほしい」と思い、2つめの例では「帰りたい」と思っていた。わたしは、ただ彼の欲望についての発言を「食べてもらわねばならないので言う通り食べさせよう」「園まで来たんだから行ってもらおう」と流すこともできた。実際、相手（子）の表明した欲望に対し、ほとんど反射のようにそれを叶えてしまったり、圧倒的な力の差を利用して自分の欲望に相手（子）を巻き込んでしまったり、慌ただしい毎日のほとんどはそんなことの繰り返し。忙しさは「～しなければいけない」「～したほうがよい」「～すべき」でできていて、そちらを見つめれば「～したい」は主語ごとどこかへいっ

てしまう。でもこのときは、彼の側にたち、彼をまなざしつつ、少したちどまって自分はどうしたいかを考えた。わたしは「自分でやってほしい」と「望みを叶えてあげたい」でゆれている自分や「いっしょに帰りたい」と「わたしがいなくても楽しい時間を過ごしてほしい」で迷っている自分を発見し、そしてどちらかは選ばなければいけないということを自覚し、引き受けようとしていた。

ふつう「母」というのは、役割として人にあてがわれたもののように使われている。でも、「母」というのは、それまで「一つの曖昧な一対」を成していた自分と相手の境目にこのうえなく敏感になり、そのうえで自分の欲望や責任のゆれを注視している「状態」を指すんじゃないか。この「ゆれ」は、自分自身の過去や考え方の枠組みだけで成り立っているものではない。自分の目の前で泣いたり笑ったり黙ったり別のこと（ときにはいたずらに見えること）を始めたりしている相手（子）によって、リアルタイムでゆさぶられつづけている。ゆさぶられながら、そのゆれに敏感になっている「状態」[10]。それこそが「母」なのではないだろうか。そして、それならば、わたしは、わたし自身を、今度こそ、確かに、「母」でもある、と思う。

いま「母」が、自分と相手の（欲望等の）境目に敏感になっている「状態」だと了解されるなら、これまで決して「母」とは呼ばれてこなかったすべての人たちも、誰かに対して「母」という「状態」になりうるはずだと気づくだろう。誰しもが「母」でありうるし、あるいはすでに「母」だったことがある。「子」や「父」や「友人」や「彼氏」やまったく子どもとは関係のない人たちを、あんたを、もし「母」と名指すのには抵抗があるならば、もうみんなまとめて新しく「ホニャララ」だとか「チンプイ」だとか、全く別の名前を充てたってかまわないけれど、なんにせよ「母」は、生物学的母だけが唯一特殊に陥る状態というわけでは、決してない。たしかに生物学的母には、そうでない人たちと決定的に異なる点がある。それが1章で見たような、「妊娠」という、身体ごとくり返し境界線を引き直す強烈な経験だ。この特殊な経験が、出産以後もその人を「境界線を引き直す」状態に比較的させやすくする動機となる可能性はある。ただし、その可能性をもっていたとしても、それは生物学的母はそうでない者と比べ、本論で言っているような「母」という状態になりやすいという傾向性があるだけの話で、やはり彼女こそが「母」なのだということは意味しない。

「母」は「わたし」たちの状態のうちのひとつであって、「わたし」でないところから突然あてはめられる別の何かなのではない。「わくわくしている」とか「緊張している」とかそういう

10　このようなゆれへの「敏感さ」をもつ状態について、2つの疑問がわいてくる。

1つは、ひごろ厭というほど続いている依存関係、相手（子）と自分の欲望とのごっちゃになりやすさの中から、「敏感さ」はいったいどうやって出て来ているのだろうか？ということ。それは、意図した冷静さから必ず出てくるような、マニュアル化できるようなものだとは思われない。それでは「恩寵」のようなものなのだろうか？どうだろう。

それからもう1つは、誰にたいして「母」になるのか？ということ。すぐ先に「ひごろ厭というほど続いている依存関係、相手（子）と自分の欲望とのごっちゃになりやすさ」と書いた。つまり私たちは、どのような相手と「一つの曖昧な一対」となるのだろうか？「自分と相手の境目にこのうえなく敏感になる」とき、その一対はどのような関係をむすび、ひらいているのだろうか？

残念ながら今は、答を用意できないけれど、考えつづけるために、これらの問いを提示しておく。

状態のときも、やっぱりそれは「わたし」であるように[11]。「わくわくしている」とか「緊張している」と同じように、「母」も、ときどきだ。「『母』になること」は、人生のなかで、たとえば反抗期のように、ある一時期始まりいずれ過ぎ去って失われるものではなく、老いのように徐々に迎え入れるものでもなく、妊娠出産のように一部の人だけにひらかれた経験なのでもない。もっと短く[12]、はかなく、けれどもかといって人生のなかにただ一度きり訪れる決定的瞬間（カイロス）のようなものでもない。素朴に、ときどきあることなのだ。「ときどき」は、目ざしたり拒絶したりするものではなく、既にわたしたちのうちにある。わたしたちは、人生の中できっと、境界を「re-establish」する。わたしたちはきっと、「母である」「母でない」を、寄せては返し寄せては返ししながら生きていく、いのち[13]。

３．あんたも母やし、ちゃうならわたしやって母やない

2 章の記述における「わたし」とは誰だったのかを、確かめていきたい。

少し長くなるけれど、まず以下の文を引用する。

> 「母性[14]とは一体何なのか？」日本のフェミニズムは、幾度となくこの問いを問うてきた。なぜ執拗に「母性」を問おうとしたのか？その問いとはどんな問いなのか？［……］
>
> 近代の女性にとって「母性」とは、自らの内部にある「はず」の何ものかとして規定された。けれども、女性の内部にある「はず」のこの「母性」は、多くの女性たちにとって、自らの内部にある「自明」なものではなかった。フェミニストならずとも、多くの女性たちが「母性とは何か？」と問うたのであり、だからこそ「母性イデオロギー」がイデオロギーとして喧伝されえたのである。［……］女性たちは「母性」というアイデンティティを規定されることで、「母性とは何か」という答えを、自らの内部に発見するよう要請されたのであり、その作業に従事することによって、自ら「母性イデオロギー」の体現者となっていったのである。
>
> フェミニズムに「母性とは何か？」という問いを執拗に問わせたものは、女性たちに「母性」を見出す作業を強制したものと同じく、この近代の「母性イデオロギー」であった。し

---

[11] 「わくわくしている」とか「緊張している」は、そのときのわたしをただ装飾している形容詞ではなくてもっとぬきさしならないものでしょう？それと同じようなもの。

[12] 「ときどき」の一つの折が、とても長く続くひとも、きっといるだろう。けれども、長さは、「ときどき」にessential なものでない（それは、人に、また時と場合によりけりで、どこまでも多様だろう）。したがって、ときどきの状態として定義する「母」についても、その状態の一つの折をどの程度長く保てるかは、essential ではない。いつかどこかで誰かが長く保持できたその一つの折を慰労する「よかったね」を、「それこそがよい」にスライドすることは、暴力だ。

[13] クラーゲスの言う「リズム」――ただ同じものを「反復」するのではなく、それがいのちであるがゆえに生じるかすかな「更新」をつねに含む、連続性の現象――を念頭に置いている。

[14] 2 章の記述を事後的に反省してみると、わたしは基本的に「母」と「母性」とを、無造作に「母」に統一して使っている。何にせよわたしが試みたいのは、とてもシンプルで、“既に引き受けている”わけでない「母」に対して、「もしかしたら、もう、わたしたち、『母』という名は手放してもいいんじゃないでしょうか…」と問いかけてみること。

かしフェミニズムは、「母性とは何か？」という問いの答えを、女性の身体や精神の内部に見出そうとすることからぬけ出し、「いかにして『母性』は作られてきたのか」という新たな問いを提起していったのである。[15]

わたしの問いも、引用文の文脈上に、ある。この論文の核である「『母』『お母さん』というのは、いったい、何なんだろう？」という問いは、今だって相変わらずわたしたちを覆っている「母性イデオロギー」を問うもので、あるいはそれによって「問わされている」と言ってもいい。それなのに、いま、この問いに対してわたしのとった手法は、時間をかけて日本のフェミニスト諸先輩方が解放へと向かわせてきたはずの、「問いの答えを、女性の身体や精神の内部に見出そうとすること」へと、また逆流させてしまったのだろうか？そう読まれる可能性はきっとある。でも、わたしの意図はそうじゃない。

フェミニストの先輩方は、「母性とは何か？」を（「いかにして『母性』は作られてきたのか？」という問いに変形させたのち）「このように作られたもの」という形で答えてきてくださった。わたしは、こうした答の一つ一つに大きく頷きながら、それでも同時にもう少し、問い確かめてみたかった。「答は、それで充分だろうか？」。なぜならば、「母性イデオロギー」がこんなにも強固であるのは、もちろんこのホモソーシャルな共同体維持と密接に関連しているから[16]ではあるのだが、もしかするとそれだけではなくて、カウンターとなる答のほうに、まだ少しピースが足りないのかもしれないと思ったのだ。だからわたしの問いは、もっと丁寧に書くならば、「『母』というのは、いったい、『作られたもの』というだけで（満足でき）ないとすれば、何なのか？あるいは、『作られたもの』以外の何ものでもないのだろうか？」

そしてわたしは、おぼろげな「自らの内部にある『はず』の何ものか」を探すこととは異なるアプローチをとろうとして、「自らの内部に『きっと』ある何ものか」あるいは「『自明に』ある何ものか」をつぶさに観察することで答を求め始めた。この、「自ら」――すなわち、この問いを問われる者――の指す内実は、「女性」だったのだろうか？ううん、そうではない。ちょっと体調が今ひとつのわたし、帰ろうかどうか迷うようなわたし、誰かと望みが食い違うただなかにいるわたし、あんたであるわたし、人間である、いのちであるわたし。そのようなわたしの観察のなかに、「母」を見出してゆく。こうした作業はすべて、繰り返すことになるけれど、引用文の文脈上にあることで、「女性たちに『母性』を見出す作業を強制」することからの解放を、切に願ってのことだ。

「母」についての話は、どうしても、錯綜する。

わたしたちに、素朴に「（わたしの）お母さん」と呼ぶ相手がいたとする。その人は、誰だろう。

---

15 『新編　日本のフェミニズム 5　母性』、岩波書店、2009、p.40

16 あるいは、「「頭のなかで作り上げられた秩序の承認」であるにもかかわらず、それを自然な認知とか身体の必然的な所産と思い込ませ」（竹村和子『思考のフロンティア　フェミニズム』、岩波書店、2000、p.71）る機能をもつハビトゥス（規範システム）に組み込まれているから、と言ってもいい。

「お母さん」は、わたしたちにとって、「まっつん」だとか「なべさん」だとかと同じ、ただの呼び名だろうか。

「（わたしの）お母さん」と呼ばれるその人は、何の疑問もなく「男」と番う「女」である人かもしれないし、そうではないかもしれない。その人は、あんたを産んだ人かもしれないし、そうではないかもしれない。その人は、あんたを育てた人かもしれないし、そうではないかもしれない。その人は、あんたを愛しているかもしれないし、そうではないかもしれない。その人は、わたしたちが「こうだろう」と設定していた諸々の前提をいつか「そうではない」と言うかもしれない。その時、その人を、あんたはやっぱり素朴に「（わたしの）お母さん」と呼ぶだろうか。

わたしたちが、「（彼／彼女の）お母さん」と認識する相手は、誰だろう。その人は、「（わたしの）お母さん」から類推して特定したのだろうか。「（わたしの）お母さん」の、どの部分、どのような特徴や性質を以て、類推したのだろう。

わたしたちの、誰かを「（わたしの）お母さん」「（彼／彼女の）お母さん」と無邪気に呼ぶことができる声は、同じ無邪気さによって、「（わたしの）お母さんではない」「（彼／彼女の）お母さんではない」と発する力をも持っている。無邪気に「お母さん」と呼んでいるはずのこの世界は、「お母さんではない」と言わず、言われずすむように構成された、本当はものすごく不安定でものすごく繊細な世界でもある。ほんの小さな何かをきっかけとして、自分自身に対して、「お母さん」に対して、「お母さんではない」と呼びかける可能性に満ちた、世界でもある。わたしたちの無邪気な声は、本当にとても無邪気。それを、「お母さん」と呼ぶその声を、「邪」だと糾弾したいんじゃない。ただ、無邪気さを引き受けたいなと、思う。可能性が現実となり、傷つくわたしがいること、疲れるあんたがいること。たとえば「子どもより仕事を選んでしまったような気がして、母親として自分は失格だとさえ感じている[17]」わたしたちがいること。たとえばレズビアンマザーだからといって「親権の訴訟をめぐって不利な立場に立たされたり[18]」幼稚園の「母の日」の絵に「描かれていなかった[19]」りするわたしたちがいること。無視しないでいたい。

今、無邪気さを引き受ける“戦略”として、わたしは、「こうやって『お母さん』って呼ぶの、もうやめてみるのってどうだろう？」と問いかける。わたしたちに、問いかける。実際には不可能だろうと知りながら。「お母さん」と呼びかける無邪気さの中に本当は、「まっつん」「なべさん」と呼びかけるのとは異なる、何らかの欠片が入っていることを、見ないふりができずに。

「母」についての話は、どうしても、錯綜する。

フェミニスト諸先輩方が解明してきてくださった、近代以降の女性が自らの内部にある「はず」だと求めさせられてきた「母」「母性」。

たとえば大日向（1988）による母性概念研究をみる。母性という用語が、研究上の概念として

---

17 大日向雅美監修『子どもを愛せなくなる母親の心がわかる本：不思議な「心」のメカニズムが一目でわかる』、講談社、2007、p.55

18 南貴子「レズビアンマザーとその家族の新しい生き方」、『日本ジェンダー研究　2005（8）』、2005、pp.43-56

19 沮谷のぞみ「「レズビアン・マザー」素描」、『女性学年報（24）』、2003、pp.132-143

もっとも確たる地位を占めている医学・保健衛生の領域での「母性」は、「*子どもを生み育てるためにそなわった特性（特異な能力）のことであるが、さらにはかかる特性をもった者の総称*[20]」とされている。この定義の対象は、かつては「妊娠・分娩・産褥期の女性を対象として、とくに子を産み、哺乳し得る能力をもつ女性」だったけれど、「近年では、むしろ広義」に「女性の性と同義」概念として採用される傾向にあるという。この「母性」という概念が女性一般へと拡大するのに伴って、「母性」の定義に「子どもへの愛情面に関する価値的解釈」が混ざったものも現れて、「母性」は混乱しながら用いられてきた。「母性」概念は非常に不明確で、多義的だということ。この話は、「にもかかわらず」と続けなければいけない。にもかかわらず、「*母性は絶対的なもの、崇高的なものという社会通念が存在している*」。

どうしてこのような社会通念が存在しているのかは、「家族」の形や、それを下支えしてきた制度の変化の歴史が教えてくれる。たとえば高良（1985）のまとめたものをみる。最初は人間が群れをつくって放浪していた時代。群れはやがて定着して、人々は「氏族」という共同体をつくる。子との生物学的繋がりが確実に辿れるのは、「父」ではなく「母」なので、はじめは「母系氏族」。これはしだいに父系化し[21]、「父系氏族」のなかから、私有財産を蓄積してきた「家父長」が出てくる。「家父長」らが氏族制度の枠をこわしてつくったのが「家父長制（または父権制）家族」。「家父長制家族」は大家族として出発する。「家というものは農民や職人の仕事場であったり、貧しい庶民の寝ぐらとしての小屋であったり、あるいは主人夫婦が何十人もの家来や使用人といっしょに住むお館であったりして、現在家庭といわれているような、夫が外へ働きに行き、妻が家を守り、夕方になると一家の団らんが行われるような家庭は存在していなかった[22]」。「アジア的社会」を経由している[23]日本では、「近代的小家族」がひろがったのは戦後だった。戦後の「資本」は、自分の意志で自分の労働力を売る労働者を必要としていた。「家族はなんといっても社会の安定要因である。［……］家族は主婦の無償労働によって家族員の労働力を再生産してくれるばかりでなく、数年後、十数年後の若年労働人口をほとんど無料で生産してくれるからである。そこで家族幻想、家族神話、家族イデオロギーがさまざまなかたちで製造され、ふりまかれ[24]」た。母性神話はその一部で、正式の婚姻の「母性」のみを称揚する差別構造を伴って喧伝された。小沢（1989）の言うように、高度成長幕開けの 1961 年に開始された「三歳児健診」が、いわゆる「三歳までは母の手で」という「三歳児神話」を生み出す政治的操作としてまんまと機

---

20 津野清男「母性保健総論」、津野清男・本多洋編『母性保健学』所収、南山堂、1976（大日向雅美「母性概念をめぐる現状とその問題点」、『新編　日本のフェミニズム 5　母性』所収、岩波書店、2009［初出 1988］、p.42 より孫引き）

21 この要因は「内的要因」：（1）母系制社会では兄弟姉妹関係が最も中心的関係であり強固な団結力を誇るため、夫婦関係としばしば敵対的になり結婚生活が極めて不安定であること。（2）母系制の相続ルールにより、男は自分の財産や地位を、自分の息子にではなく姉妹の息子＝甥に与えねばならない葛藤があること。ならびに「外的要因」：女性が農耕の主役であった芋栽培から多大な労働力を必要とする穀類栽培への変遷との二面があり、特に外的要因が最大の原動力となったと言われている。鍵谷明子「母性の多義性：文化人類学的考察」、脇田晴子編『母性を問う：歴史的変遷　上』所収、人文書院、1985

22 高良留美子『家族 3 人著作集③　母性の解放』、亜紀書房、1985、pp.20-21

23 同上 p.162

24 同上 pp.57-19

能した[25]し、大日向（1988）の言うように、この高度経済成長の時代、「家庭のない子」「母親のいない子」の発達に生じる問題として「ホスピタリズム」研究が切り取られて導入されていった。

フェミニズムは、「子を産む女性は生来的に育児の適性も備えており、母の子に対する愛情は他に比類のないほどすばらしい[26]」と――「女性」からも――繰り返される声に、何度だって答えてきた。そうじゃない、って。それは、繰り返す声をもみ消すためじゃなかった。あんたをいなくしたいんじゃ、なかった。「お母さん」繰り返す声のあんたが居る、「母性はやっぱりある」繰り返す声のわたしたちが居る、ただね、繰り返す声に馴れることのできないわたし、繰り返す声に息が詰まるわたしたちも、居る、同時にここに。居る。そのため。

今、すこしやり方を変えてみようという“戦略”として、わたしは、「『母は本来的にあるもの』も『母は作られたもの』も、一旦やめてみるのってどうだろう？」と問いかける。わたしたちに、問いかける。「諦めよう」ということといったい何が違うのだろうと苦しみながら。「一旦」が、もしかしたらそのまま取り返しのつかない喪失につながるかもしれないと恐れながら。それでもわたしたちが、受け入れあえないということに、もう充分疲弊しているのを見過ごせずに。

「母」についての話は、どうしても、錯綜する。

わたしは、「母」を、わたし自身に耳を澄ませて、探していく。これから先、どんなわたしになっていっても、いつだって、そうやって、探していく。そして、あんたに、それを伝えて、今度はあんたに、耳を澄ます。

今はね。わたしは、わたしと「曖昧な一対」（ボーヴォワールというひとは、とてもうまいこと言うね）を成してるって思うような相手が、いる。全然、対等なペアじゃなくて、ぐらぐらしているパワーバランスがあって、ふだんはその相手の欲望を力づく丸め込んだり、相手の欲望がわたしを捉えて離さなかったり、している。これそのものは、「母」でもなんでもなくてただの依存関係やって、わたしは思うよ。でもな、ほんのときどきやけど、まさにその相手と、そうじゃないあり方ができることが、ある。自分と相手とを、自分の欲望と相手の欲望とを、その境界をよく見つめようと、できることが、ある。何度も何度も、いつもくり返し[27]、見定め、ひきなおさなあかんその境界に、なんとか目を凝らそうとできてる状態を、疲れるけどな、わたしは、気に入っている。「母」が、ただ「依存状態」とイコールなものやなんて、気が重いしつまらない、正直なところ最悪。でも、その「依存状態」ではないほう、ときどきの状態のほうを指すのかもしれない、と思うと…、いや、というより、そのときどきの状態を指して、「母」と呼ぼうと思

---

25 紙幅の関係で注にて引用するにとどめるが、現代の状況を考えるうえで、小沢の以下の指摘も参照したい。「いまや、三歳神話の時代から、乳児神話がひろめられる時代に入った。それは明らかに、医学・心理学分野における母－子のインタラクション研究と、行政レベルにおける一才半健診の実施とがからみ合う中で作られている流れである。しかもそこにマスコミや乳幼児を対象とする諸産業（赤ちゃん教室、ベビー用の教材･玩具等々）が、若い母親たちの意識に拍車をかけている。」小沢牧子「三歳児神話と母性イデオロギー　乳幼児政策と母子関係心理学：つくられる母性意識の点検を軸に」、『新編　日本のフェミニズム 5　母性』所収、岩波書店、2009［初出 1989］、p.91

26 大日向雅美「母性」、井上輝子ほか編『岩波女性学事典』、岩波書店、2002

27 その境界が、固定でもしてたら楽なんやろうけどね、生きものどうしやから、そうはいかない。

い始めると、わたしはなんだか、世界のなかにまたひとついいものを見つけたような、そんな気分になった。そういう「母」も、見つけたんだよって、わたしあんたに伝えたかった。

「母」についての話は、どうしても、錯綜する。「見ないですむように蓋をする」ことさえをも含んでしまうようなこの錯綜を、きれいさっぱり一掃したいんじゃない。それはわたしたちを、生きるということを、消してしまうことだよ。わたしたちは、錯綜している。生きるということは、錯綜している。苦しいね。でも、この錯綜を、わたしもあんたも引き受けられるかたちは、あるんじゃないかと目を凝らしつづけたい。引き受けられるかたちがあるならね、それは未来に求めるのではなくて、既に引き受けてるはずやとわたしは強く思う。(「これこそ我が発見した引き受けられるかたち、さあいざ引き受けん」なんてあほみたいや。)「既に引き受けている」て言い方は、えらい感じがするかな、でも大したことじゃない。ときどき、くらいなら、心底「ああ」と思える「母」が、実はあるかもしれない。それを、探そう。それを、語ろう。あきらめたくない。あんたと、探したい。あんたと、探していきたい。わたしたちで、そういう「母」の話をしよう。わたしも、あんたも、「母」って話。

(かつらのぐちゆい　臨床哲学・博士前期課程)

参考文献

・ 生島遼一訳『ボーヴォワール著作集　第二の性』、人文書院、1966
・ 大日向雅美「母性」、井上輝子ほか編『岩波女性学事典』、岩波書店、2002
・ 大日向雅美監修『子どもを愛せなくなる母親の心がわかる本：不思議な「心」のメカニズムが一目でわかる』、講談社、2007
・ 小沢牧子「三歳児神話と母性イデオロギー　乳幼児政策と母子関係心理学：つくられる母性意識の点検を軸に」、『新編　日本のフェミニズム 5　母性』所収、岩波書店、2009［初出 1989］
・ 居永正宏「フェミニスト現象学における「産み」をめぐって：男性学的「産み」論の可能性」、大阪府立大学女性学研究センター『女性学研究』、22、p.105、2015
・ 鍵谷明子「母性の多義性：文化人類学的考察」、脇田晴子編『母性を問う：歴史的変遷　上』所収、人文書院、1985
・ 金井淑子『依存と自立の倫理：〈女／母(わたし)〉』の身体性から』、ナカニシヤ出版、2011
・ 釜野さおり「レズビアン家族とゲイ家族から「従来の家族」を問う可能性を探る」、家族社会学研究 20 (1)、2008
・ 高良留美子『家族 3 人著作集③　母性の解放』、亜紀書房、1985
・ 竹村和子『思考のフロンティア　フェミニズム』、岩波書店、2000
・ 津野清男「母性保健総論」、津野清男・本多洋編『母性保健学』所収、南山堂、1976（大日向雅美「母性概念をめぐる現状とその問題点」、『新編　日本のフェミニズム 5　母性』所収、岩波書店、2009［初出 1988］、p.42 より孫引き）
・ 汨谷のぞみ「「レズビアン・マザー」素描」、『女性学年報（24)』、p.132-143、2003

・南貴子「レズビアンマザーとその家族の新しい生き方」、『日本ジェンダー研究 2005（8)』、2005
・彌永信美「母」、永井均ほか編集、『事典哲学の木』講談社、2002
・李静和『つぶやきの政治思想：求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの』、青土社、1998
・ルートヴィッヒ･クラーゲス、平澤伸一･吉増克實訳『リズムの本質について』、うぶすな書院、2012
・Bergum,Vangie, “WOMAN TO MOTHER: A Transformation”, Bergin&Garvey Publishers, inc., Massachisetts, 1989
・Heinämaa, Sara, “An Equivocal Couple Overwhelmed by Life”: A Phenomenological Analysis of Pregnancy, in *Philosophia*, *4(1)*, 2014
・Kristeva, Julia. “Stabat Mater.” in The Kristeva Reader, edited by Toril Moi, Oxford: Basil Blackwell, 1986[1983]
・Young. Iris Marion, “Pregnant embodiment: Subjectivity and alienation”, in On female body experience: “Throwing like a girl” and other essays, New York: Oxford University Press, 2005[1984]

You are the very “mom”: Reconsidering the concept of “mother” with Feminist Phenomenology

Yui Katsura-Noguchi

In general, when we call or imagine “mom”, we will see Her in a certain role or a behavior. Due to this tendency, many “mom” are often forced to compare themselves with a certain “mom” and to consider herself an “insufficient-mom” or a “bad-mom”, despite the fact that many feminsts have shown that the role or the behavior is not innate.

I would like to define the word “mother” as an already-existing-state which emerges from “an Equivocal couple.” This “an Equivocal couple” is the idea of pregnancy proposed by Simone de Beauvoir, but I would like to link this idea to the concept of “mother”.

“Mother” is an already-existing-state that happens when we are very sensitive to the boundary either between My/Yourself and the other half of my/your equivocal couple or between the desire of Mine/Yours and that of the other half’s of my/your equivocal couple.

In short, “mother” is an-already-existing-state-in-you which happens off and on; therefore, it is neither Her identity nor Her circumstance.

Furthermore, “mother” must be neither ideology, agitation, nor such things which disregard Your reality and concern only about the superficial future; it must be grasped by Your description; it must be You as you are, whether You are pregnant or not, You have disorder or not, You have children or not, You love them or not, and You are a female or not.

The Feminist-Phenomenologist Sara Heinämaa described pregnancy as the experience of re-establish ing the self-other or the own-alien boundary. I believe that we will be able to find our already-existing-re-establish ing moments in our lives and to start to think not only about pregnancy but also about “mother” from them.

「キーワード」
母、妊娠、境界、母性神話、エクリチュール・フェミニン